

鳩 鳥 考

鳩の正体はニューギニアピトフイか

Inquiry of bird *Chin*

Is the legendary bird *chin* the same as a bird New Guinea Pitohui?

和泉 堯己・富士川龍郎

Takaki Izumi and Tatsuo Fujikawa

Existence of the legendary *chin* (鳩, zhèn on Chinese) which is well-known as a toxic bird from ancient times in China have been possible as a real being by the discovery of a tropical toxic bird pitohui in Papua New Guinea. Then, in order to investigate that this two species is the same or not, documentary records of *chin* in Japan and China were collected as much as possible, a figure of *chin* which is reasonable scientifically and most probable was formed, and this figure was compared with pitohui. It was considered consequently that the *chin* is other species than pitohui. However, because several similarities was also recognized between the two species, it could not be definitely negated that some toxic bird existed in the past of China. Therefore, it was suggested with raised possibility that *chin* or at least some model bird for *chin* was a real existence in ancient China.

要 約

中国で古来有名な伝説的毒鳥鳩は、熱帯性毒鳥ニューギニアピトフイの発見によって、実在していた可能性が出てきた。そこでこの2種の鳥が同一ないし近縁種の鳥か否かを検討するため、日本と中国の鳩に関する文献を出来るだけ集め、科学的に無理がなく、かつ最もありそうな鳩像を再構成し、それとピトフイとの比較を試みた。結果的には鳩はピトフイその物ではないと判断されたが、鳩とピトフイとは類似点もあって、過去に毒鳥が存在したことを一方的に否定することはできず、ピトフイの発見によって鳩が嘗ては存在した、あるいは鳩のモデルになった鳥がいたという可能性は高まったと考えられた。

緒論 種々な生物は自分で毒を生産したり、あるいは食物などから毒物を取り込んで蓄え、自身の防衛—化学防衛—に当てている例が多い。これらの毒はその正体を突き止めてみると、“恐ろしい”、“陰湿な”というイメージとは逆に生命現象の解明に大変有力な武器となるのである。著名な動物毒としては昆虫やサソリな

どの毒があり、脊椎動物では毒蛇、毒魚が有名である。しかし鳥類では上記のような意味での毒鳥の話はこれまで聞かれなかった。ところが1992年に Johan P. Dumbacher¹⁾らはニューギニアの密林に猛毒を持つ鳥ニューギニアピトフイを確認してこれを報告した。この報告は「世界初! 毒鳥見つかる」という見出しで雑誌科学朝日にトピックスの一つとして紹介された²⁾。

一方伝説ないし古文獻上の話としての毒鳥ならば中国に著名な例がある。鳩(チン)、その名は中国では古くから有名な鳥で、左伝³⁾の始めの辺りや楚辞⁴⁾に既にその名が表われている。それはこの鳥が猛毒を持っていて、羽を酒に浸して毒を溶出すると毒酒が得られ、殺人や自殺によく用いられたということに由来している。もっともこの毒酒は簡単に手に入るものではなく、この毒酒が使われるのは専ら王侯貴族のみであったらしい。しかしそれほど有名ならその鳥や毒成分について確かなことが知られているかという点、これが極めて曖昧である。

著者には上記ニューギニアピトフイと、中国で有名な毒鳥「鳩」があるいは同一の、ないし近い系統の鳥ではないかと思われたので、これを期に中国の文献等

をいくらかしらべたのであるが、この仕事は著者には専門違いで手に余ることであり、時間的にもそこまでの余裕を持合せていない。そこで現時点までに調べ得た範囲のことで一応の考察とその結果をまとめ、後をこの方面の専門の方に任せたいと考えて報告する次第である。

なお毒一般については、雑誌、化学、Vol. 49, No. 8 (1994) に特集があるので、興味のおありの方は参照していただきたい。

文献上の鳩の概念 まず鳩がこれまでどのように見なされてきたかを文献上で集めてみる。ただし鳩の字の音韻や字解に関することは省略し、漢文は読みやすくするため、筆者に判断できるところは句読点を付け、かつなるべく略字または当用漢字に改めた。また文を引き出した書籍が異なっても、原出典が同じことが明かな文は一文だけとした。文を引き出した書籍は右肩付きで番号を付け、書名は文献の欄にまとめた。S...とある番号は本文中に引用するときの文章番号である。

日本の文献 まず日本の文献に現われた鳩を集めてみる。

大漢和辞典⁹⁾ S 1 鳩；1) 毒鳥の名。その羽をひたした酒はよく人を殺す。雄を運実、雌を陰諧という。2) 鳩羽を浸した酒。又その酒を用いて人を毒殺する。毒酒。酖と同じ。3) あぶら虫(蜚)を食う鳥。4) 或雌に作る。

鳩殺；毒殺する。鳩の血液に毒有り。(一説に羽に毒あり)、古、これを用いて人を毒殺した。

鳩酒；鳩毒を入れた酒。毒酒。

鳩鳥；毒鳥の名。其の羽を浸した酒を飲めば死ぬという。

鳩毒；1) 鳩の羽を酒に浸した毒。2) 毒の甚だしい者のたとえ。酖毒。3) 毒酒で人を殺す、鳩殺。

鳩毒鳥；毒を有する鳥。南海に産す。昔死罪者に鳩毒を入れた酒を賜わって死せしめた。

(以上大漢和辞典)

これで見ると鳩は鳥名であると同時に鳩鳥の羽を浸した毒酒の名でもあり、その毒酒で人を殺すことでもあり、広く一般に猛毒の別名としても使われていることになる。鳩の形態や習性は和漢三才図会⁷⁾と本草綱目啓蒙⁹⁾に記載がある。一まず日本と中国の文献を列挙してみる。

和漢三才図会⁷⁾ S 2 鳩 本綱、鳩は鷹に似て大きく、状鶖(ミサゴ)の如く、紫黒色に赤き喙、黒き目、頸の長さ七八寸あり。雄を運日と名づく。雌を陰諧と名づく。雄鳴くときは則ち晴れ、雌鳴くときは則ち雨

ふる。その声腰鼓を撃つが如く、同力(トンリツ)と云うに似たり。故に同力鳥と名づく。大木の頂きに巢う。巢の下数十歩に皆草木生ぜず。蛇及び椽の実を食う。木石の間に蛇有ることを知るときは、即ち内歩を為して以てこれを禁す。須臾に木倒れ石崩れて蛇出づるなり。蛇口に入るときは即ち爛る。その尿溺石に着けば石皆黄爛たり。飯水の処にて百虫これを吸うに皆死す。人誤りてその肉を食えば立処に死す。惟だ犀の角を得て、即ち其の毒を解すのみ。此の鳥商州・蘄州の山中に出づ。

本草綱目啓蒙⁹⁾ S 3 鳩；和産詳ならず。(一名)沈鳧(事物異名)、鷓(文選)、曇(事物紺珠)、雲日鳥、頃刻鳥、一拂鳥(共同上)、檀鷓(説類)。

唐山にて毒酒を為に只此羽をもって酒を拂うと云、然れども唐山にも産せず、故に形状分明に説かず、本経逢原に「S 4 與鷓頂之毒無異」と云う、南寧府志に「S 5 秋冬中脱羽、人以銀爪拾取、著銀瓶中、否則手爛墮。以之瀝酒、飲人即死、所謂鳩酒。今以鷓鳥紅毛、非也。」と云う。医学入門に「S 6 鳩鳥毒、即孔雀毛併膽也。」と云う。

次に中国の文献を上げる。

辞海 下⁹⁾(日本の書体になおして記載。)

S 7 鳩 [鳩] (一) (zhèn 震) ①伝説中一種毒鳥。雄の呼運日、雌の呼陰諧、喜食蛇、羽毛紫黒色、放在酒中、能毒殺人。参見「鳩酒」。

(二) [酖] (zhèn 震) ①毒酒、如：飲鳩止渴。②以毒酒害人。(注：日本版康熙字典¹⁰⁾では音「タン」、著者) 鳩毒；①毒薬；毒酒。②毒害。鳩酒；毒酒。

これで見ると現中国では鳩を単に伝説上の鳥としか考えていないようである。

次に漢文(清以前の文献)に表われた例を上げる。

爾雅翼¹¹⁾

S 8 鳩^{6,11)}鳩毒鳥也、似鷹而如大鴉也、紫黒色長頸赤喙、雄名運日、雌名陰諧、天晏静無雲則運日先鳴、天将陰雨則陰諧鳴。之故淮南子云、運日知晏、陰諧知雨也。食蝮蛇及椽実、知巨石大木間有蛇虺、即為禹歩以禁之、或独或羣進退俯仰、有度逡巡、石樹為之崩倒、蛇虺無脱者。昔有人入山、見其歩法、帰向其妻学之、婦正織而機翻。或日取蛇虺時、呼同力数十声、石起蛇出。故江東人呼同力鳥、或曰禁蛇之声、如以手撃腰鼓大率。蛇入口即爛、矢溺著石、石爛如泥。一説尿石即變為雄黄及生金。古人以其羽瀝酒、則能殺人。 S 9 凡鳩、飲水処百虫吸之皆死。或得犀牛羴角其中即無毒。此鳥與犀相伏。今南方山川、有鳩必有犀、蓋天資之以育物。

S 10 離騷經^{5,11)}云、

望瑤台之偃蹇兮 見有娥之佚女 吾令鳩為媒兮
鳩告余以不好 雄鳩之鳴逝兮 余尤惡其佻巧
心猶予而狐疑兮 欲自適而不可 鳳凰既受詒兮
恐高辛之先我。[注：星川⁵⁾では鳩，著者]

夫媒所以合婦道也。鳩既毒物，又其雌鳩自有好陰好晏之異，其同居異志。如此則宜其為人媒，而告人以為不好也。雄鳩物之至拙者，不能為巢，雨則逐其匹，霽則返之，其為拙亦甚矣，而尤惡其佻巧，於是求夫和鳴如鳳凰而託之，又貧餒而受詒則高辛之先我必矣。蓋屈原之始，罹憂讒人惡之至，其久則雖平日所謂賢者亦皆隨俗變化，而不察。故始則惡服艾之盈要，而其久也，筌蕙化為茅矣。始也，惡鶉賦之先鳴，而其久也，鳳凰既受詒矣，宜乎，有國無人，莫我知之歎，而將從彭咸之所居也。

S 11 庸國史補曰，鸚鳥千歲為鳩，愈老則愈毒，同力即鳩也。或言，亦老而化為鳩。

S 12 陶隱居，又云，鳩鳥狀如孔雀，五色雜斑，高大黑頭赤喙，出交廣深山中。與古所謂運日同力者別。而諸家言，只一種，更無如孔雀者。

S 13 按吳都賦亦云，白雉落黑鴉毛則鳩色宜黑，彼如孔雀者當別一物耳。

(以上爾雅翼)

本草綱目¹¹⁾

集解¹¹⁾ S 14 別錄曰，白鳩生南海。

S 15 陶弘景曰，鳩與鴉日是兩種。鳩鳥狀如孔雀，五色雜斑，高大黑頭赤喙，出交之深山中。

S 16 鴉日狀如黑鴉，作聲似云同力。故江東人呼為同力鳥。並啖蛇，人誤食其肉立死。並療蛇毒。昔人用鳩毛為毒酒，故名鳩酒頃不復爾。又海中有物，赤色狀如龍，名海薑，亦有大毒，甚於鳩羽。

S 17 蘇恭曰，鳩鳥出商州以南江嶺間。大有人皆諳識其肉腥，有毒不堪啖，云羽畫酒殺人，亦是浪證。

S 18 郭璞云，鳩大如鴉，長頸赤喙食蛇。

S 19 說文，鳩雅，淮南子，皆以鳩為鴉日，交廣人亦云鴉日即鳩，一名同力鳥，更無如孔雀者，陶為人所誣也。

S 20 時珍曰，楊廉夫 鐵厓集云，鳩出新州黃梅山中，狀類訓狐，聲如擊腰鼓，巢於大木之顛，巢下数十步，草皆不生也。

S 21 「毛氣味」別錄曰有大毒，入五臟爛殺人。

S 22 「喙主治」別錄曰帶之殺蝮蛇毒，時珍曰蛇中人刮未塗之登時愈也。

(以上本草綱目)

鳩鳥部芸文¹¹⁾

S 23 「鳩說²²⁾」唐無能子

鳩與蛇相遇，鳩前而啄之。蛇謂曰，世人皆毒子矣。

毒者惡名也。子所以有惡名者，以食我也。子不食我則無毒。不毒則惡名亡矣。鳩笑曰，汝豈不毒於世人哉，指我為毒是欺也。夫汝毒於世人者，有心嚙人也。吾怨汝之嚙人，所以食汝示刑也。世人審吾之能刑汝，故畜吾以防汝。又審汝之毒染吾羽毛肢体，故用殺人。吾之毒汝之毒也。吾疾惡而蒙其名爾。然，殺人者人也，猶人持兵而殺之也。兵罪乎，人罪乎，則非吾之毒也明矣。世人所以畜我而不畜汝，又明矣。吾無心毒人，而疾惡得名，為人所畜。吾所為能後其身也。後身而甘惡名非惡名矣。汝以有心之毒，眈睨於草莽之間伺人，以自快。今遇我天也，而欲詭弁苟免耶。蛇不能答，鳩食之。夫昆虫不可以有心。況人乎。

鳩鳥部紀事¹¹⁾

S 24 尸子駙馬共為荊使於巴。見担醜者。問之是何以，曰所以醜人也。於是請買之，金不足，又益之車馬。已得之，盡注之於江。

S 25 穆帝本紀¹¹⁾升平二年三月，飲飛督王饒，獻鳩鳥。帝怒鞭之二百，使殿中御史，焚其鳥於四達之衢。

S 26 墨客揮犀¹¹⁾至和中，余赴任邕，至金城。驛郵置早膳。聞如以手苔腰鼓者。問郵卒曰何處作樂，曰非也，乃鳩鳥禁蛇。

S 27 過庭錄¹¹⁾忠宣宰襄邑，有二鳥類，鸛灰羽赤喙，遊囿眾為異。以術數致得，畜之愛。蛇虺入口中，即為水。畜之半年，一巢蛇虺幾盡，竟不知其名也。有江南賈者，過見之曰，此擅鴉毒鳥也。後死其一居無。何忠宣閱交南異物志曰，擅鴉鳩鳥別名。始大驚駭，即命殺而焚燹之。

S 28 「遜齋間覽^{11,12)}」有人任嶺南官，至山寺登廁，忽有異禽飛集廁前，石上跳躍，作聲若巫家之禹步者。須臾石裂，出一青蛇，乃銜之而去。見者大駭問，寺僧云，正鳩鳥也，蓋唯食毒蛇乃能成其毒。

S 29 「遜齋間覽^{11,12)}」新州黃梅山，有鳩巢於山巖大木中，巢下数十步無生草。每春生一子，能飛即送出山，惟二雌獨留。此與金山石穴二鴉無異。

(以上鳩鳥部紀事)

珍鳥部雜錄¹¹⁾

S 30 譚志化書¹¹⁾；毒鳩怒土石揭。

S 31 羣碎錄¹¹⁾；今人呼藏酒器曰曇。S 32 抱朴子曰曇是鳩鳥別名也。

S 33 潛溪遂言¹¹⁾；行遇刃者必避食，逢鳩者必舍懼害己也。

(以上鳩鳥部雜錄)

山海經¹³⁾

S 34 中山經^{11,13)}361 又東北百二十里，曰女几之山，……中略……其鳥多白鷗，多翟多鳩[鳩大如鴉，紫綠色，長頸赤喙。食蝮蛇頭。雄名運日，雌名陰諸也。]

S35 中山經^{11,13}380 又東南二百里，曰琴鼓之山。…中略…其鳥多鳩。

S36 中山經^{11,13}393 又東北二百里，曰玉山。…中略…其鳥多鳩。

S37 中山經^{6,10,13}417 又東六十里，曰瑤碧之山。…中略…有鳥焉。其狀如雉，恆食蜚[蜚，負盤也]。名曰鳩 [此更一種鳥，非食蛇之鳩也]。

(以上山海經)

博雅¹¹⁾

S38 釈鳥¹¹⁾：鳩鳥其雄謂之運日，其雌謂之陰諸。抱朴子¹¹⁾

S39 登涉篇¹¹⁾：運日鳥及蠃龜，亦皆啖蛇，故南人入山，皆帶蠃龜之尾運日之喙，以辟蛇。蛇中人刮此二物，以塗其瘡，亦登時愈也。曇是鳩鳥之別名。

新論¹¹⁾

S40 殊好篇¹¹⁾ 鷓鴣日嗜蛇。(注)鳥似鷓鴣高三尺，亦曰鷓鴣。

S41 [福惠全書，刑名部，人命下]⁹⁾南海有鳩毒鳥，似鷹而大，狀如鴉，紫黑色。

S42 [國語・魯語上]^{6,9)}：晉人執衛成公，婦之干周，使医鳩之，不死。

S43 顏師古注^{9,10,11,15)}引応劭曰：「鳩鳥黑身赤目，食蝮蛇野葛，以其羽劃酒中，飲之立死。」

S44 [說文]^{6,10)}鳩，毒鳥也，一曰運日。

S45 [廣雅，釈鳥]^{6,10)}鳩鳥，其雄謂之運日，其雌謂之陰諸。

S46 酖：[說文]¹⁰⁾樂酒也。「徐曰」酖酖然，安且樂也。[廣韻]嗜酒。

S47 [左伝 莊公三十二年]^{4,6,9,10)}使鍼季酖之。(注)酖鳥名。其羽有毒，畫酒飲之，則死。春秋左氏会箋⁴⁾莊公三十二年，箋曰，[S48 鳩毒鳥。雄曰運日，雌曰陰詣。形似鷹，大如鴉，毛黑，喙長七八寸，黃赤如全。食蛇及橡矣。常居高山巔。酖用鳩羽為毒酒也。字或為酖。據說文，酖樂酒也。…中略… S49 隋志有晋秘書監傅暢晋諸公讚二十一卷。正義引之云，鳩鳥食蝮，以羽翻樂酒水中，飲之則殺之。旧制鳩不得渡江，有重法。S50 石崇為南中郎，得鳩(?)。以与王愷養之。大如鴉。喙長尺余。純食蛇虺。司隸伝祇於愷家得此鳥奏之。宣示百官，燒於都街。]

S51 [左伝^{4,6,9,10,11,15)}閔公元年]宴安酖毒，不可懷也。孔穎達疏：「宴安自逸，若鳩毒之藥，不可懷恋也。」(注)鳩與酖通。又酖。

S52 [集韻]¹⁰⁾鳥名，或作鷓，鷓。

[鳩羽]¹²⁾S53 [晋書賈后伝論]初椒椒宮逞皇，心于長樂，方觀梓樹，頌鳩羽于離明。S54 [陸游避世行]君渴未嘗飲鳩羽，君飢饑未嘗食鳥喙。

[鳩毒]¹²⁾S55 (後漢書，単超伝)^{9,12)}梁冀兩妹，為順桓二帝皇后。…中略…驕橫益甚。皇后乘勢忌恣，多所鳩毒。上下鉗口，莫有言者。S56 (荀悅阿保乳母論)¹²⁾甘醴有鳩毒，藥酒有治病，是以君子以道折中惟義而後已。

[鳩酒]¹²⁾S57 (晋語)^{6,9,10,11,12)}申生祭于曲沃，婦福于絳。公田，驪姬受福，乃置鳩于酒，置董于肉，公至，召申生獻，祭之地。地墳，申生恐而出。

S58 (漢書高五王伝)^{9,12)}齊悼惠王肥，孝惠二年入朝，…中略…太后怒，遣令人酌兩卮鳩酒置前，令齊王為壽。齊王起，帝亦起，欲俱為壽。太后恐，自起反卮。

S59 (陸游南唐書雜芸伝)^{6,12)}申漸高優人。昇元中，為教坊部長。周本自吳，時有威望。…中略…左右莫知所為，漸高託俳戲，舞袂升殿日，勅賜臣。漸高併飲之，納杯懷中而出，烈祖密遣中人，持藥解之，不及，腦裂而卒。

[鳩鳥]¹²⁾S60 (漢書注)鳩鳥黑身赤目，食蝮蛇野葛。以其羽畫酒中，飲之立死。S61 (晋書石崇伝)^{11,12)}前略…崇在南中，得鳩鳥雛，以與後軍將軍王愷。時制鳩鳥不得過江，為司隸校尉伝祇所紮。詔原之，燒鳩于都街。

S62 (六部成語訂正，刑部，鳩札，注解)⁹⁾鳩，鳥也，其血有毒，飲此殺人，古人恆有用之者，此言鳩者，乃用毒藥乃借稱也。

鳩に関する漢文の文献で集め得たものはおよそ以上である。この他にも単に人を酖した，鳩殺したというだけの記事は多い (例えばS42, S45, S47, S51など)。また詩文や比喩として使われた例もかなりある (例えばS10, S23, S33, S46, S54, S56など)。これは鳩が広く知られていたことを示している。しかしこれらは同定には役立たないのでなるべく省略した。これら文献の中で和漢三才図会⁷⁾S2はほぼ爾雅翼¹¹⁾鳩S8に取材していることは明らかである。しかし本草綱目啓蒙⁸⁾は爾雅翼¹¹⁾鳩S8と本草綱目集解¹¹⁾S14以外にも本経逢原S4, 南寧府志S5や医学入門S6からも取材しているので，本報告に集め得た他にもまだ鳩鳥に関する記事があることは察せられる。事実「中国随筆索引」¹⁰⁾には鳩と酖の項があり，いくつかの記事が上げられているが，筆者は未だ見ることを得ないでいる。参考のためにそれ等を挙げておく。

酖：1. 代父飲酖，湧幢小品，卷20，(明)朱国楨。2. 文帝路淑媛被酖，十七史商榷，卷57，(清)王鳴盛。3. 酖人取香火，子不語，卷14 (清)袁枚。鳩：4. 鳩，粵西叢載，卷22，(清)汪森。5. 酖鳥，七修類彙，



Fig. 1. 鳩鳥図1, 古今図書集成, 文献11) より, 荒木然一補筆。

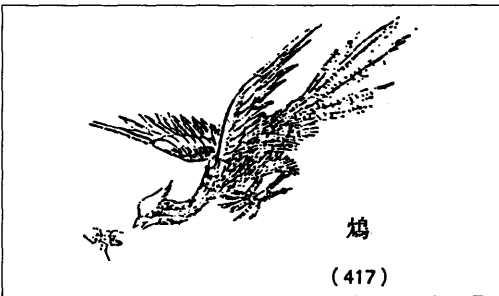


Fig. 2. 鳩鳥図2, 山海経, 文献13), 417項付図, p 748より。



Fig. 3. 鳩鳥図3, 本草綱目(論衡, 中国古典文学大系7, 平凡社, p 515より)。

卷46, (明)郎瑛。6. 弁鳩鳩, 能改齋漫録, 卷15, (宋)呉会。これらのうちで4, 5, 6は特に興味がある作品である。

また異なった図柄の鳩鳥図を3種見いだしたのでFig. 1~3に示す。

以上のほかマルコ・ポーロ; 東方見聞録¹⁷⁾, 周達観; 真臘風土記¹⁸⁾, A. R. ウォレス; マレー諸島¹⁹⁾, 鄧鐘; 安南図誌²⁰⁾を瞥見したところでは毒鳥の記述は見出し得なかった。

これら鳩に関する文献を通してみると記述にかなり異同があり、異なった鳥が何種類か混同されているようにも思われるS12, S13。また鳩という字についても必ずしも鳥自体を指すのではなく、鳩酒あるいは猛毒のもの一般を指す場合もあるS1, S7ようで、それらを区別することは非常に困難である。また文献としての信憑性の問題もあるがここでは一先ず全部かなりの信憑性を持つものとみなしておく。以下項目を分けて類別してみる。

大きさa: 大きい方では鶺鴒S2, S41, S48が最大であろうが、他に鷓鴣S18, 孔雀S12, S13, S15, 檀鷄S27, 鶯S50などもあり、「高大三尺」という記事S40もあるから、ミサゴから鶏位の中~大型の鳥a1が想定される。ほかに鶯鷄S16, 檀鷄S26があるが、どのような鳥かよくわからない。小さい方は「鶺鴒S8」というのがあり、これは辞書には「フクロウ」と「ミソサザイ」の二者がでている。フクロウはa1の鳥と見なせるが、ミソサザイは小鳥である。ほかに小鳥と思われるものに訓狐S20があり、大漢和辞典⁹⁾にコノハヅクで訓狐は鳴き声であるという。コノハヅクならば小鳥と見てよい。ほかには小鳥と比べた文献は見当たらない。これらより鳩の大きさはフクロウ以上ミサゴ位の中~大型のものa1と、ミソサザイやコノハヅク位の小型の鳥a2と、二種の記述があることになる。

頸の長さb: 体形のうち、多くの記事は頸が長い「長頸S8, S18」b1とし、頸の長さ七八寸S2という。しかし短頸b2という記事は見当たらない。

眼の向き(顔面)p: 鳩と比較している鳥は鶏のように両目が左右に向いているものと、鶺鴒(フクロウとする)やコノハヅク(訓狐)のように両眼とも正面を向いているものとに分けられる。記録者がこのことを意識していたか否か不明であるが、一応注意しておく必要があろう。鶏型の鳩をp1, フクロウ型の鳩をp2としておく。他に文字としては沈兎S3があるが、フクロウ型の鳥であることを形容するのか否かわからない。

喙の大きさc: 喙の大きさや形についてはほとんど記事がないが、これを特に長くはない(2~3寸以内)

と見なして c1 とする。左氏会箋⁹⁾の注に一つだけ喙の長さの記事 S48 があって、それによると「喙長七八寸」という、また同所の石崇伝 S50 では「尺余」となっている。石崇の時代の 1 尺は約 24cm である。この喙長の鳩を c2 とする。体長に比してかなり長い喙である。しかし S48, S50 の記事は頸の長さと混同している疑いが多少感じられる。

体色 d : 多くの記事は「黒身, 赤喙」(S8, S18, S12, S43, S60, など) d1 であるが、赤喙は「赤眼」となっているもの d1a もある。黒眼 S2 となっている文献は d1 にいれておく。他に紫黒色 S2, S7, S41, 紫緑色 S34 というのもあるが、黒を基調とする色ということで黒身 d1 に含めておく。また黒身とは対照的に白鳩 S14 という字もあり、これが果たして毒鳥鳩の中に含まれるものかどうか、実物の鳥がないので判断しかねる。一応 d3 としておく。そのほかでは孔雀のごとく五色雜斑 S12, S15 というのもある d2 が、陶隱居の偽り S12, S13, S19 だともいう。この点について文献を見ると、本草綱目啓蒙⁹⁾は鳩の異名の一つとして「鷓 (文選)」S3 をあげている。「鷓」を大漢和辞典⁹⁾でひくと、「鳥名, 南海に産す」とだけで、ほかに左思, 吳都賦の注として、「劉曰, 師曠曰, 南方有鳥姜鷓, 黃頭赤目五色備也。」と出ている。この通りとするとずいぶんけげんばしい体色と思われるが、文選が編纂されたのが陶弘景の後半生の頃であるから、このころ (6 世紀初頭) 鳩と鷓とか混同されていて、陶隱居の言う「如孔雀 S15」となったのであろうか。この辺りのことは陶弘景が道教の展開に深い関わりがあった²⁰⁾ことを考え合わせると、鳩の妖怪化(後述)とも関連しそうであるが、詳しい考証は専門の方に任せたい。

体形や体色に関しては鳩の実見談と考えられる記録 S24, S25, S26, S27, S28, S50, S61 でも、ただ異形の鳥というだけの記載ばかりで、ほとんど同定の参考にならないのは残念である。

食性 e : 食性は「好食蛇」というのが最も多い。多分ノネズミなども食べると思われ、肉食性 e1 である。しかし同時に椽の実を食う S48, S8 とともに野葛を食う S43, S60 ともあり、これならば雑食性 e2 である。ほかには「蜚」を食う S37⁹⁾ e3 というのがあり、これは山海經¹⁹⁾に e1 とは異なると記してある S37。椽の実は日本でも馴染みのものであり、サポニンを含むがいわゆる毒はない。野葛は辞書によると日本にはなく、有毒であるという。「野葛を食う」というのも鳩が毒鳥であることからの想像の産物のようにも受け取られる。蜚は問題であるが、ここでは Fig. 1 の中の虫のようなものとしておく。

鳴き声 f : 「如以手擊腰鼓大率 s26, S2」f1 というのが明瞭な記載であり、鳩の鳴き声を模写すると「同力, トンリツ (現代中国音は tónglǐ) S2」となるのであろう。しかし「如擊腰鼓 S8, S2」とするのはむしろキツツキが木をつついていところを思わせる。鳩が「蛇を禁ずる」時、蛇のいる辺りをつつきまわる S2, S28, S8 というのもキツツキの習性を思わせる記述である。ほかに「訓狐 S20」とあるのも鳴き声が鳥名になったとされるが、「同力」と同様うつろなものを打つ音であろうか。f2 とする。しかし「鳩告余以不好 S10」をオームのように人語を話すとするのは考え過ぎであろうか。人語を話す鳩を一応 f3 としておく (鳩のモデルの項参照)。

営巢 g, 繁殖 h : 巢は「大木の頂に作る S2, S20, S29」g1 という記事と、巢その物ではないが「常居高山巔 S48」g2 の二つがある。繁殖 h は毎年一卵を生む S29 という以外の記事は見当たらず、しかも巢作りは下手である S10 というから、繁殖力は小さい h1 と考えられる。

毒 i : 毒について述べた記事にほぼ共通なのは、鳩の羽に毒があり、酒, つまりエタノール (より正確には希エタノール) で容易に抽出される (S1, S3, S8, S43, S47, S60 など) という i1。しかし異論があって、血液に毒がある S1, S62 とも記されている i2。また肉も有毒 S2, S16, S17 ともいう i3。これだと結局身全体に毒があることになる。この他の鳩毒の性質として、「巢の下数十歩に皆草木生ぜず S2, S29」, 「飯水の所にて百虫これを吸うに皆死す S2, S9」とか、「屎溺石に付けば石黄変して爛る S2」というのは一寸信じられない。もし真ならば石を加工するのに苦労はないはずで、この鳥の屎溺を集めて使えば、簡単に石を加工できるわけである。もしこれが見かけ上「黄変してて爛る」のであるとすると次のようなことではなからうか。鳥の糞は磷酸塩が外側に固まって通常は白く見えるのであるが、(海鳥の糞が付いて固まった岩を考えればよい)、この鳩では糞に色が付いていて (例えば胆汁色素) 黄色く見えるので、上述のような記事になったのではなからうか。また巢の下に草木が生えないというのは多分屎溺から発生するアンモニアのためであろう。また鳩の触れた水を吸った虫は皆死ぬ S2, S9 のならば、鳩が常に毒を大量に分泌していることになり一寸無理であろう。「屎石即變為生金 S8」は妖怪の項参照。鳩毒の生化学については次項で述べる。

鳩毒の生化学 j : 「鳩毒鳥也」と言うならばその毒とはどんなものかということ、ただ「羽を酒に浸せば人

を殺せるほどの毒酒を作り得る」というだけで、その酒がどんな色や味で、飲むとどのような中毒症状が現われるのかといった鳩毒の生化学に関しては、集め得た文献の範囲ではほとんど手掛かりがない。わずかに「脳裂而卒 S59」j1, および手に付けば「手爛墮 S5」, 「蛇虺入口中即為水 S27」, 「蛇入口即爛 S8, S2」, 「入五臟爛殺人 S21」という数条 j2 があるだけである。これらのうち、S21 をのぞいて j2 の方は明らかにプロテアーゼ系の毒であり、蛇毒と同系統の物質としてもおかしくはない。ただしそれだとエタノールに溶け易いことと、羽毛にプロテアーゼを有することに問題が出てくる。一方 j1 の方は「脳裂」がどんな症状なのか想像できないが、もし口や鼻から血を噴出するというような症状であればむしろ水銀など腐食性の毒が想定されるので、生物が生産する毒とするのは少し無理なようである。S21 はむしろ S59 にまとめたほうがよいかもしれないと思われるがはっきりしない。

また鳩毒の解毒剤 k として漢方薬として使われる犀角 k1 が上げられている一方で、蛇毒の解毒剤として「鳩の喙の粉 k 2」を使う S22, S39 というのは面白いが、どんな蛇毒にも有効なのかどうか、つまり毒蛇の種に対する特異性があるのか否か、もし鳩の喙が入手可能なものならば試してみたい所である。鳩毒は鳩が蛇を食って蛇毒を蓄積するためと考え、またそれでも平気というところから逆に鳩の喙などが蛇毒の解毒剤として考え出されたもの²¹⁾であろうが、この前半分の考え方は現代の見方からしても必ずしも間違いではない（例えばフグ毒）。鳩を解毒剤とするのと同じような例はアフリカにもある（鳩のモデルの項参照）。

分布 1: 鳩の分布は、山海経¹⁹⁾で女儿の山を比定すると S34, 武漢の辺りから東北に 370 里、約 150km の辺りとなる 1 1。ところがこれより時代が下ると話の中心が南下して、江南の地での話が多くなり、江嶺間の事柄 S17 が中心になる 1 2 ようである。さらに「広南異物志 S27」の名が表われたり、「出広之深山中 S15」, 「南海有鳩毒鳥 S41, S 1」とあるところを見ると、この「広」を広州路と見て嶺南 S28 の、それも南の方の話 1 3 となるようである。要は鳩の分布が時代が下るにつれて次第に南方に移っていくのである。このようなことは単に嶺南～南海は暗い未開の地というイメージだけで、そのような所だから、かつ開けたところには鳩が見付からないから、南海こそ鳩がいるところだとなっただけであろうか。反面これらの話が事実であるとする、鳩はもともと南方ないし熱帯性の鳥 1 3 であることが示唆される。

実在性 m: これらを通観すると結局鳩の実在は曖昧

であり、単に伝説に過ぎない m 1 ようにもみえる。しかし中国人の間では少なくとも嘗ては実在することが信ぜられていたことは確かである。何故なら鳩の実見談や鳩を飼育した話 S27, 江南の商人が「この檀鷓は毒鳥だ」S27 と言ったこと、さらに鳩には「時制不得渡江」という法律まであった S49, S61 ことが何よりの証拠である。法律の話は西晋の詩人石崇 (A C 249~300) に関係したことであるから 3 世紀から 4 世紀のことである。

又この鳩は単に猛毒をもつというだけでなく、よほど中国人から憎まれ嫌われていたようである。例えばそれは離騷の注 S10 や、鳩と知って直ちに殺して焼き捨てた記事 S24, S25, S27 などに示されている。鳩が嫌われるようになった理由は文献上では明らかでないが、単に有毒というだけでなく、離騷とその注 S10 にあるように、人によく告げ口すると見られていたためではなからうか。想像が許されるならば、離騷の文面から鳩が楚の、または屈原の率いた巫祝集団²²⁾の占いのための使い女とされていたとも考えられる。それがよく人の告げ口をするというので嫌われ、これと前後関係はわからないが、そんな陰険な鳥なら蛇を食うはずだということになり、だから有毒だということになったとも推測される。そして鳩がこのようなことから憎まれ嫌われれば、古代～中世の中国人にとってのスケープゴートの一つとなったのも頷けることであろう。そして毒の有無にはかかわりなく見付かり次第殺され、しかも繁殖力が小さければ S29, たとえ昔は実在していたとしても比較的早く絶滅してしまって不思議ではない。これらのことはどこか中世の魔女裁判を思わせる所がある。しかし一方では鳩を弁護する物語 S23 もあって、これは正にイソップ物語である。この話は面白い上にあまり知られていないようなので全文 S23 をあげておく。

鳩の超能力 ごく古い時代の文献では「告余以不好 S10」, 鳩酒を地に注ぐと「地墳」S57 という位のこと、鳩自身の特別な能力を殊更強調するようには描かれていない。山海経でも郭璞の注を除くと特別な記述はしていない。このことはかえって鳩が当時それほど珍しい鳥ではなかったことを意味するのではなからうか。しかし時代が下ると、(後漢頃からと想像するのであるが) 3~4 世紀頃から鳩は次第に異常な能力、それも道教的な超能力の持ち主のように描かれてくる。例えば内歩して蛇を禁ずると石樹が崩倒し S2, S8, 同力と鳴くと石がひっくり返って蛇が現われ S8, 鷓鳥が千年の劫を経ると鳩になり S11, 鳩が怒ると地面が膨れ上がる S30, 尿溺が付くと石が爛る S8, また

は生金になるS 8等である。これらは事実としては信じられないが、観念の中の鳩が普通の鳥から次第に妖怪に進化し始めたことを示すのではなかろうか。そして妖怪化しきらないうちに時代の方が先に進んで、または鳩が実在の鳥でありまたそれほど大物でなかったために²⁹⁾、あるいは鳩が民衆の中へ降りてこなかったから、妖怪への進化が停止してしまったように思われる。しかし妖怪としての鳩を論ずることはこの報文の目的ではないのでこれ以上論ずることは避ける。

考え得る鳩の像 鳩がもし実在したとすれば其の形状はa~pの組み合わせのどれかに当たるはずである。そこで科学的に無理がなく、なるべく多くの記事に共通する特徴を「最もありそうなこと」として組み合わせを作ってみる。

a 大きさ；記事の数から a1 であろう。b 頸；「長頸 b1」であろう。p 顔面；記事の数から見て鶏型 p1 であろう。c 喙；特に長いことはない c1 と考えられる。d 体色；「黒身赤喙 d1」であろう。e 食性；肉食性 e1 としてよいようである。f 鳴き声；「如撃腰鼓」f1 で、音は「トンリツ（現代中国音では tónglǐ）」に近い。g 巢；高い所にかける g1。h 繁殖力；弱い h1。i 毒；主に羽毛にありアルコールに可溶、猛毒 i1。j 羽毛の毒が手をただれさせる毒と同じならばプロテアーゼ系の毒 j 2 である。l 分布；最も近い時代の分布は中国南部 l 3、熱帯性の鳥であろう。m 実在；現在は見付からないようであるが、少なくとも嘗っては実在が信じられた m 2。

これらから鳩の形状を凶鑑風に描いてみると次のようにならうか。

「かなり大型(鷲位)で全身黒色、目の辺りと喙だけが赤い。頸は体に比べて長く、両眼は横向きについている(鶏型の顔)。食性は特に蛇を好み肉食性である。鳴き声は鼓を打つようである。肉は有毒である上に腥くて食用にならない。羽毛に猛毒があり、この毒はエタノールに易溶で羽毛を酒につけるだけで人を殺すに足る毒酒が得られる。高い所に巢を作るが、繁殖力は弱い。分布：中国南部、熱帯性の鳥である。利用：1. 毒薬として、2. 蛇毒の解毒剤として使われた。現在はほとんど絶滅している。」

次に「世界初の毒鳥ニューギニアピトファイ」はどんな鳥かということ Johan P. Dumbacher らの報文¹⁾から取り出してみよう。この報文で扱われているのはフードピトファイ hooded pitohui (*Pitohui dichrous*)、バリアブルピトファイ variable pitohui (*P. kirhocephalus*)、ラスチピトファイ rusty pitohui (*P. ferrugineus*)

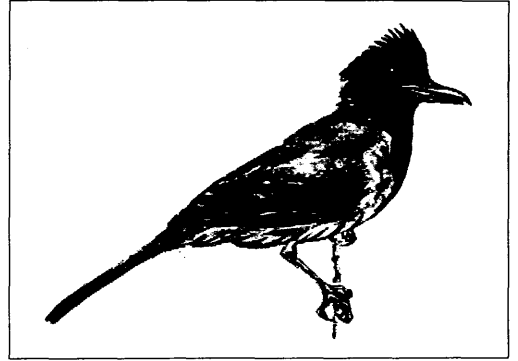


Fig. 4. フードピトファイ, 文献 1, Science, 258, 30 October 表紙より, 荒木然一画。

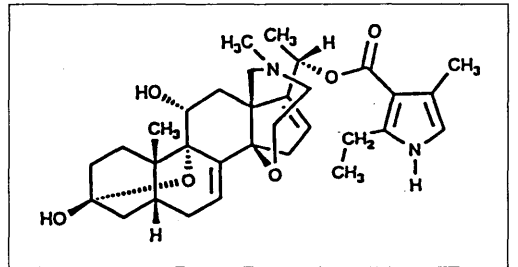


Fig. 5. ホモバトラコトキシンの化学構造, 文献 1) より。

の3種であるが、此处では毒性の最も強いフードピトファイを代表例として述べることにする。なお以上の鳥は和名が未定のようなので仮にこの様に仮名書きしておく。またフードピトファイは Science Vol. 258, 30 October のカラー写真からスケッチした図を Fig. 4 に示す。

この鳥は写真で見ると名のように冠毛を持ち (Fig. 4)、体色は後頭部を残して頭、顔、喙、喉から胸の上部にかけてと尾羽は黒、残りの部分は茶橙色 brown orange (むしろ黒身に茶橙色のチョッキを着せたよう) で、赤眼、黒瞳、かなり目立つ色彩をしている。バリアブルピトファイは冠毛が目立たない他はフードピトファイとそっくりである。ラスチピトファイは冠毛はないように見え、フードピトファイの黒い部分だけを雀の羽で置き換えたような色合いである。大きさはフードピトファイの成鳥で60~70 g 位、大型のラスチピトファイで100 g 位、バリアブルピトファイはその中間で、特にフードピトファイは写真からは中々精悍な感じを受ける。ピトファイはニューギニア地方では剥製にしたりして利用されているほかには、食べられない「つまらない鳥 rubbish bird」といわれているそうである。もし口にしてもまずく、「皮は苦く、口唇がざらつき uncomfortable になる」

というから、ひどい渋柿を食べたような具合であろうか。この鳥の剥製を扱うと頬や鼻の感覚麻痺や灼熱感、嘔などを引き起こす。これは埃と共に次に述べる毒を吸い込むためである。

この鳥はホモトラコトキシシン *homobatrachotoxin* というステロイド系アルカロイド (steroidal alkaloid, 化学構造は Fig. 5) をもち、これが毒の本体で、体重 65 g のフードピトファイ成鳥は皮膚 (重量にして 4~5 g) 中に 15~20 μ g, 羽に 2~3 μ g, 筋肉その他を合わせた中に 1 μ g 以下含まれている。そしてこの毒はエタノールで抽出される。またこの鳥は酸様の不快臭 *sour odor* が強いという。しかし食性、鳴き声などについては記載されていない。ホモトラコトキシシンの毒性は強く、フードピトファイの皮膚 10mg から抽出した毒 (ホモトラコトキシシンとして 0.03~0.05 μ g) でマウスを 10~20 分で殺す力がある。毒の量がこれ以下 (ホモトラコトキシシンの約 0.01 μ g かそれ以下) であると、後肢の麻痺、移動困難、*prostration* をきたす。この毒の作用機序はナトリウムのイオンチャンネルを阻害するところにある。

ピトファイと鳩とを比べてみると次のような異同が認められる。

形態、体色: ピトファイの黒とオレンジというのは黒身、赤喙、または赤眼というのと、また蜚を食う方の鳩鳥図 Fig. 2 では冠毛があるように描かれているのはフードピトファイに冠毛があるのと、強いていえば類似していないこともない。しかしピトファイの体色はむしろ「橙身、黒頭、黒尾黒翼」という感じで、「黒身」とは言いかねるようである。顔の形も鶏型 p1 でフクロウ型 P 2 ではないから、鶯 (フクロウとして) あるいは訓狐というのは当たらない。

大きさ: 大きさは報文にある 3 種のうち最大のラステイピトファイで約 100 g, フードピトファイで 60~70 g, これは「鳩大如鶯」とは大きく異なる。ただし前述のように鶯は鶯と書かれている例があり、これだと前述したようにミソサザイにも当てられているし、訓狐がコノハズクであればピトファイに近い大きさである。しかし「喜食蛇」という所はかなり大きな鳥でなければ一寸考え難いであろう。ピトファイまたはミソサザイの大きさでは無理のようである。

喙: ピトファイの喙を実測した記載はないが、写真で見るとピトファイの喙は体長の割に長く見える。これは鳩の喙が一尺前後 (20~30cm) というのと体長との比率では合っているようである。

食性と毒: 報文²⁾にはピトファイの食性についての記載がないが、鳩は「食毒蛇」ということで有名なのであ

る。ピトファイの毒は実は蕁毒の一種と同じなのである。特にコロンビア毒蛙 *Phylllobates* の持つステロイド系アルカロイドの一つと同じで、この毒蛙の皮膚は現地では吹矢の毒として用いられるという。一方蛇毒は蛇の唾液腺から進化した毒腺から分泌されるもので、ステロイド系ではなく蛋白質系で、化学的には全く別系統の物質である。従って蛇毒はエタノールでは抽出し難く、また鳩の消化管で消化されるから、吸収されて鳩毒になるとは考えがたい。鳩が毒蛇を食べるからその毒に染まって有毒なのだといわれていたのが、正体を現わしてみるとと蛙の毒だったということになると皮肉である。ではピトファイの毒は毒蛙を食べるためではないかという疑問が出されようが、これは両者の分布が全く異なっていて重ならないことから否定されている³⁾。

マウスで実験されたピトファイの毒を人間の場合に換算してみよう。マウスの体重を約 30 g として 1 匹当たり致死量が 0.03~0.05 μ g という量は、体重 60kg の人に換算すると 0.06~0.1mg に相当する。もしこの換算された致死量が正しいとすると、0.1mg のホモトラコトキシシンはフードピトファイ 5~6 羽分の羽と皮膚に含まれる毒の全量に相当する。まして羽だけで毒酒を作るとするとこの約 10 倍、50~60 羽分の羽を必要とすることになる。盃一杯分の酒を約 100ml として、この酒に羽と皮膚を浸すだけでこれだけのホモトラコトキシシンを溶かし出すためには、酒のロスを考えると毒の含量がかなり高い必要があり、フードピトファイのホモトラコトキシシン含量ではちょっと無理のように思われる。逆に言うと鳩のもつ毒はピトファイに比べて余程強烈な毒であるか含量が高いかということになる。

一方ピトファイの *sour odor* が強く食べられないという記述は「人皆諳識其肉醜 S 17」と似ている。

その他鳴き声などについては述べられていない。

分布: ピトファイはパプア・ニューギニア辺りの熱帯に分布するようである。鳩はもし実在したとすれば前述のように時代が下るにつれて分布が南下している。それゆえ本来は熱帯の鳥ということになり、この点はピトファイと似ている。しかしそれにしては文献 (18), (17), (19), (20) に毒鳥の話が現れないのは一寸意外である。

この様に比べてみると、文献に記載されているような鳩が実在していたとして、鳩とピトファイとは種を異にする鳥と考えねばならないであろう。その根拠としてはまず大きさと体色の相違があり、次に毒成分の違いである。ただし毒成分に関しては鳩の毒が蛇の毒であるとしてのごとくである。仮に毒成分が同じとしても、含量に大差があると考えられることも鳩とピトファイが

異なることの間接的証拠となろう。古代から近代に至るまで、鳩が現代生化学の方法で分析されたはずはないので、鳩毒が蛇毒由来ということにこだわることはないかも知れない。そうすると「羽毛に毒がありエタノールで抽出可能」という鳩の毒とピトフイの毒の類似点が生きてくる。つまりピトフイとは別の種の鳩という大型の毒鳥が嘗ては存在していたということを否定できず、可能性としてはむしろ高まっていくのではなかろうか。

結論としては、鳩その物が得られないと明確なことは言えないということである。初めの子想とは異なった結果となったが、といて鳩の存在が完全に否定されたわけでもない。ピトフイのような毒鳥が発見されたということは、今は絶滅したが嘗ては黒身、長頸、赤喙、赤眼で、ピトフイと同じように皮膚や羽毛に猛毒を持つ大型の鳥がいたという可能性を却って強めたのではないと思われる。そうすると例えば龍のモデルの一つに揚子江鱷 *Alligator sinensis* が考えられている²⁴⁾と同様、鳩にもあるモデルになる鳥(必ずしも毒を持たなくともよい)があって、鳥自身が比較的希な存在であり繁殖力も弱かった上、本当は毒を持たなかったとしても、人に忌まれて早く絶滅し、そのため鳩の実体が混乱しわからなくなってしまったのではないとも考えられる。実際に鳩のモデルを探すつもりで鳥類図鑑を開くと、意外に鳩のモデルになりそうな図に出逢うものである。例えば手近なところで鴛鴦や九官鳥は大きさを別とすれば黒身黄喙(赤喙ではないが)、南アジアの原産であり、おまけに人語をしゃべって「媒をなすS10」ことが可能であるし、鳥類図鑑²⁵⁾に記載されているキタタキ *Doriocopus javensis* は外観(黒紫色)、分布(中国南部その他)などから同力鳥のモデルに、ガマヒロハシ *Corydon sumatranus* は長頸とはいえないにせよ、まさに黒身、赤喙、異形の鳥であり、アオミキジ *Crossoptiron auritum* も黒身、赤頭赤喙といてよく、いずれも鳩のモデルになりそうな鳥である。またアフリカにはヘビクイワシ *Sagittarius serpentarius* という鳥がいてノネズミや蛇を好み、この鳥の肝臓は蛇毒の解毒薬として使われ、羽などは呪術に必須である²⁵⁾というから、これは鳩の喙を削って蛇毒を消したりS22、鳩を占いに使う(前述)というのと同工異曲である。鳩は必ずしも単に伝説上の鳥とばかりとはいえないであろう。(同図鑑²⁵⁾には蛇を食うヘビクイワシの図が載せてある。Fig. 3の鳩鳥図はこれと同工の図柄である。)

なお毒鳥という観点から一言付け加えると、科学朝日の「世界初の毒鳥」というのは必ずしも正しくない。

というのは和漢三才図会²⁶⁾鳩鳩の項(P579)に、この鳥は「好んでで半夏鳥頭の苗を啖らう。故に肉に微毒有り。」という記述があり、この「微毒」が季節的なものとしても、もしこれが証明されれば鳩鳩が毒鳥の最初の記載となるからである。

終りに、報文の作成に当たり、見ずらい鳩鳥図への補筆とフードピトフイのカラー写真からのスケッチとは比治山女子短大美術科荒木然一氏のご厚意に頼ったことを記して感謝の意を表します。

文 献

- 1) Johan P. Dumbacher, Bruce M. Beehler, Thomas F. Spande, H. Martin Garraffo, Johan W. Daly, Homobatrachotoxin in the Genus *Pitohui*: Chemical Defense in Birds?, Science, Vol. 258, 30 October, pp 799~801, 1992.
- 2) 科学朝日, Vol. 53, No. 1, 通巻625号, 1993. トビックス欄, p 53.
- 3) 竹内照夫訳, 春秋左氏伝, 中国の古典シリーズ2, 平凡社, 昭和50年. 莊公32と閔公元年(pp 56~57).
- 4) 竹添進一郎, 漢文大系 Vol. 10, 左氏会箋 上, 富山房, 昭和49. 莊公32年 (p 96), 閔公元年 (pp 1~2).
- 5) 星川清孝訳, 楚辞, 新釈漢文大系34, 明治書院, 昭和45.
- 6) 諸橋徹次, 大漢和辞典, 大修館書店, 1986, pp 806~807.
- 7) 寺島良安尚順編, 和漢三才図会, 日本庶民生活史料集成, No.28. 鳩 p 610, 鳩鳥図 p 602, 鳩鳩 pp 579~580.
- 8) 小野蘭山著, 杉本つとむ編著, 本草綱目啓蒙, 卷之45, 29葉, 早稲田大学出版部, 昭和49, p 728.
- 9) 辞海 下, 上海辞書出版社, 1979, p 4060.
- 10) 渡部 温, 標注訂正康熙字典, 講談社, 1977. 馱 p 2912, 鳩 pp 3366~3367.
- 11) 古今図書集成51, 博物彙編, 禽虫典, 上冊, 卷1~102, 鳩鳥部, 第519冊之17~18葉, 鼎文書局.
- 12) 古典複音詞彙輯林, 第7冊, 十五画1519646, 鼎文書局印行.
- 13) 前野直彬, 山海經, 全釈漢文大系33, 集英社, 昭和50, 中山経, 女儿之山(361)p 318, 琴鼓之山(380)p 326, 玉山(393)p 335, 瑤碧之山(417)p 348.
- 14) 高馬三良訳, 山海經, 中国古典文学大系8, 平凡社, 昭和49, 中山経, 女儿の山 p 482, 琴鼓の山

p 483, 玉山 p 484, 瑤碧の山 p 485。

- 15) 聯綿字典, 第4冊, 中華書局, 鳥部, 鳩毒, 101亥。
- 16) 京都大学東洋史研究会編, 中国隨筆索引, 思文閣 1972。鳩 p 669, 猷 p 663。
- 17) マルコ・ポーロ, 愛后松男訳, 東方見聞録1~2, 東洋文庫183, 平凡社, 1987。
- 18) 周達観, 真臘風土記, 東洋文庫507, 平凡社, 1989。
- 19) Alfred Russel Wallace, 宮田彬訳, マレー諸島, 思索社, 1992。
- 20) 鄧 鐘, 安南図誌, 四部叢刊続編, 台湾商務印書館。pp 9323~9340。
- 21) 山崎幹夫, 毒の話, 中公新書781, 中央公論社, 1992, pp 7~8。
- 22) 白川 静, 中国の神話, 中公文庫, 中央公論社, 1991。第6章, 特に pp 202~215。
- 23) 中野美代子, 中国の妖怪, 岩波新書235, 岩波書店, 1983。Ⅲ, IV章。
- 24) 林巳奈夫, 龍の話, 中公新書1118, 中央公論社, 1993, pp 17~20。
- 25) 荒俣 宏, 世界大博物図鑑4, 鳥類, 平凡社, 1987。キタタキ p 274, ガマヒロハシ p 279, ヘビクイワシ p 103。
- 26) 葛兆光, 道教と中国文化, 坂出祥伸監訳, 東方書店, 1993。

和泉 堯己 (コミュニケーション学科)

富士川龍郎 (短期大学)

(1995. 10. 31受理)